




セックスしないと出られない部屋



P 03

冒頭サンプル

P 32


♡喘ぎ、汚喘ぎ サンプル 1

P 36

♡喘ぎ、汚喘ぎ サンプル 2

P 43

♡喘ぎ、汚喘ぎ サンプル 3



セックスしないと出られない部屋

冒頭サンプル

セックスしないと出られない部屋、というのがある、らしい。

付き合っていない男たちをセックスしないと出られない部屋に閉じ込めてホモにする、エロシチュエーションだ。

いや、男女でいいじゃん！恋愛感情が一切ない友達や知らない男と入れられたらめっちゃくちゃ困るだろうなと思う。

でも、片想いの相手とそんな部屋に入ったら千載一遇のチャンス！！って仕掛けするものだろう

この機に告白して、あわよくばお付き合いできたら最高だ。

でも違う。

もし、今の関係を絶対に壊したく無い、望みのない相手で。自分の気持ちを絶対に伝えることができない相手だったら。

「……で、どうするよ智央」

白い部屋にベッドとサイドテーブルのみ。

俺と智央は背中を向け合ってダブルベッドに座っていた。

サイドテーブルには紙が一枚と、サラダドレッシングみたいな入れ物が一本透明でどろどろとした液体が入っていて、それから四角くてギザギザの中に丸い物が入った、アレだ。

「どうするったって……」

ローションとコンドーム、それと

『この部屋は智央さんが藍さんの中で射精しないと出ることができない部屋になっています。達成する前に出ようとする二度と出られなくなります』と書いた紙。

俺と智央は二人で頭を抱えていた。

確か……他の友人数人と一緒に酒を飲んで遊んでいたはずだが、気づいたら俺と智央だけここにいた。

「いつこんな殺風景な部屋に模様替えしたんだよ……あーもしかして、ドッキリですかあ？」

「オレがこんな悪趣味なドッキリ仕掛けるわけねーだろ、……なんで俺とお前だけなんだ？」

部屋を出ようとしたが、紙に書いてあることがちらついてお互いにドアノブに手をかけることすら躊躇していた。

しばらく重い沈黙が続いていたが、急に智央が「あー！」と頭をかきまわして「やっぱこんな非科学的なことありえねえんだ！普通に開けてでようぜ」と言った。

やっぱ俺となんかセックスしたくないもんな、でも。

「出れなくなったらどうすんだよ」という俺の言葉にへなへなと座り込んでいた。俺は、といえば。

やべえ……本当にこんなタイミングが来るなんて、思ってたなかった……と心臓をバクバクさせていた。

俺は智央が好きだ、もうずっと前から智央のことが好きだった。

智央はノンケだ。俺だってノンケだったはずだが、智央に狂わされてからはバ
イになってしまった。

でも解ることは、ノンケは好きでもない相手、しかも男に好意を寄せられてる
なんて知ったら怖いってことだ。

俺は智央との友情を壊したくなかった、このままジジイになるまで親友のまま
遊んで暮らせたらよかった。

智央の結婚式に呼ばれて、あいつがバージンロード歩いてるのを後ろで見れた
ら良いな。それで幸せになれよって祝福する。それでいい。

だから俺の智央への恋心ってのは胸の中の深い場所に沈めて、静かにこの感情
が朽ちていくのを待つだけのモンだった。

絶対に智央にバレない様にしないとって思っていた。万が一バレて、気持ち悪
いなんて言われたら。

そう考えただけで恐ろしかった。

でも、今は違う。

「指示通りにするしかないんじゃないのか、智央さんよ」

まるで、やれやれみたいな感じで軽く言いながら。

俺の心臓は破れるんじゃないかってくらい激しく鼓動してた。

俺の気持ちを伝えること無く、智央に抱かれる機会。

終わった後、暫くの間気まづくなるかもしれない。それでもなるべく普通に接して生活したらきつと元に戻れ……ないかもしれないけど。

「オマエ、本気で言ってるのか？」

「じゃあどうすんだよこの状況で」

もう怪訝そうな顔をしている智央に、やっぱり嫌だよな、当たり前だよなと思つて胸がチクチクする。

でも、いや、今は後のことなんていい。

このチャンス逃す訳にはいかなかった。

「なあ、智央」

ずっと背中を向け合っていた、けれど俺が後ろを向くと智央もこっちを向いた。あんま顔、見られたくないんだけどな。

「う、おっ……！ あつぶねーな」

「へっ」

肩に腕を引つ掛けるみたいにまわして、ぐんって引つ張る、後ろに倒れてきた智央の上に乗つかると、「マジでやるつもりか？」と少し上目に睨まれた。

「だーかーらー、こうなっちまったんだからしかたねーだろ」

智央はすっげえ俺のこと睨みつけてて、はやく上から避けるって言ってるけどやめるつもりはない。

ああ……いやだな、こいつに嫌われるの。

「オマエは寝っ転がって目瞑って、チンコだけ俺に貸してればいいよ」

でもやっぱこわい、なるべくいつも通りにしていなければ、ちゃんとなつてつかない。

智央は信じられないみたいな顔して俺を見上げて絶句していた。

まあ、そうだよな……ごめんな。

「まあ俺に全部任せとけよ！俺、慣れてるから」

「は？」

やば、なんか言葉まちがった。慣れてるってなんだよ。

智央も眉間に皺を寄せてキレそうな顔してて、正直こわい。男に跨られて嬉しいわけないわな。

それでも、ここで止まる訳にはいけない、誰が与えた機会かは知らないが、この氣を逃せば一生回って来ないだろう。

だったらさあ、一回くらい夢見させてくれてもいいじゃんね。

「いいから、まあ好きな女の子のことでも考えておけ、智くん♡」

智央のシャツのボタンを外しながら、ちゅ、とわざとらしく音を立てて鎖骨にキスをして、不機嫌な智央のご機嫌と取ろうとしたが眉間の皺は深くなるばかりだ。

「マジでやんのかよ……」

「やんないと一生俺とここで暮らすことになるかもよ」

「ッ……」

こええよ、智央。怒りで震えてんじゃん。そろそろ、殴られるかなあ。

そう思いながらそろりと手を伸ばして布の上から触る。当たり前だけど萎えた、けど智央の拳は飛んでこなかった。

そのまま腹くくって、今だけ我慢してくれよ。

ズボンのチャックを下ろして、パンツをずり下げて、まだ柔らかいそれを取り出す。

「ふ、キバレよ智央、さっさとやることやって部屋出ようぜ」

顔に擦り付けて頬擦りしながら言うのと、智央は何か言い返そうとしたけど諦めて口を閉じた。

サイズ的には大丈夫そうだ。こんなこともあるのかと、普段から想像の智央サイズの玩具でケツを拡張している。大丈夫だ、やれる。

根本から舌を這わせて、ゆっくりと先端に向けて舐め上げていく。智央の顔を見ると、目を閉じて天井の方を向いていた。

やっぱ直視できないよな、こんなん。

友達が自分のチンコ舐めるとか、おまえからしたら地獄みたいな罰ゲームだろうから。

舌でちろっと舐めて、先っぽを口に含むと智央がびくりと動いた。

フェラなんて初めてだから上手く出来てるかわかんねえけど、AV女優みたい

にやってみるか。

歯が当たらないように、ゆっくりと口に含んでいく。根元まで簡単に飲み込めた。そこから頬の肉を使って抜くようにして頭を上下させる。

ぐぼっ、じゅぷ、と水音が部屋に響く。

手で扱いたりを繰り返しているうちに、くちの中が少しずつ苦しくなってくる。
「ぶあっ……」

一旦口でするのは休憩して手で抜く。智央のものは明らかに大きくなっていた。俺の手の中でドクンドクンと脈打っている。

智央が気持ちよくなってるんだと思うとなんだか嬉しくなってきた、もっと良くしてやりたいという感情が湧いてきた。

片手で竿を、もう片方の手で玉袋を握る。

優しく揉みしだいてやるとそれに合わせて智央が息を漏らすから気分が良くなった。

「ッは……」

気持ちいいか？智央……そう思わず聞きたくなる。

亀頭の裏側の辺りを親指でぐり、と押すようにすると智央は小さく声を上げた。裏筋が弱いのかもしれない。

カリ首のあたりも指でなぞってみると、智央のものが更に大きくなった気がした。

あ、あれ……？こいつのクツソでつかかないか……？膨張率エッグツツツ……

さっきまで俺の口に入り切るくらいのサイズだったのに。めちやくちやデカイ。俺が想定してたやつと比べ物になんねえ。

あれ、これ、俺のケツに本当に入るのか……？

「藍……」

呼ばれてはつとして、俺は顔を上げた。智央の耳が赤く、息も熱っぽい。

ほんとに、気持ちよくなってくれてる。智央が感じてくれてるんだってことに気づいた時、不安よりも喜びの方が大きかった。俺は興奮していた。

もっと、きもちよくしたい。

本来ならすぐに俺の中に入れて終わらせるべきなのに、智央の反応をずっと見

ていたい。

それを思ったら、もう止まらなかった。

「ん、んぐっ……」

「お、オイ！もう、いいだろっ……」

今度は喉の奥に届くほど深くくわえ込むと、智央が焦ったような声で言った。
だめだ、一回ちゃんとイかせてやろう。どうせ、俺の方の準備もあるし。

口を窄めて、舌で先っぽを刺激してみる。

智央が少しだけ腰を引いたから、逃がさないように両手で抑えてやった。口の
中で智央がビクビク震えている。

「ジ、んう、……！んぐ、うっ……ん、！」

「は、ッ……藍っ……」

切羽詰まってきた声が聞こえてきて、その艶やかな智央の声に俺の鼓膜が揺れ
て腹の奥がキュンとした。

喉奥に刺さるくらいまで、更に深くまで飲み込むと、喉奥から唾液が溢れてく
る。

頭を動かすたびに涎が顎下に垂れて、それが智央のものに伝っていくのがわかった。

智央のものはビクビクと脈打って、今にも爆発してしまいそうだ。

口の中に苦い味が広がってきた。智央の限界が近いらしい。

「ふ、グッ！んん……ッ！！」

「もう、いいッ……藍ッ、出るからっ……」

智央が苦しそうな声を出した。

でも、やめてなんかやらない。ちゃんと口の中で出してくれるまで、やめてやれない。

ラストスパートをかけるように激しく頭を上下させる。智央のものが脈打つ感覚が短くなっていくのを感じながら、強く吸い上げるようにして刺激すると智央はぶるりと身体を震わせて、小さく声を上げて達した。

「ンン、んう、ゾ……んっ……！！」

「くっ……」

智央のものはどくと脈打ち、ビュルルル——！！っと勢い良く出た精液が食

道に直接流し込まれていく感覚。

口の中に苦くて青臭い味が広がる。それは決して美味しいものではない。それでも、ごくりと音を立てて飲んでやる。

「んぐっ、んう……ッ、ぷはっ……は、あっ……あ、あ……」

「ッ、く、……ッ」

勢いよく吐き出された精液は量が多く俺の口内に収まりきらずに顔にまでかかってしまった。おれは溢れないようにそれをしっかり顔で受け止めていた。

そして、全部受け止めた後に、智央の逸物についた分を舐めとって、最後にちゅうつと先端を吸って、残りのものも口の中に収めた。

「す、すまな、藍、……」

智央は申し訳なさそうにしているけれど、俺はそんなこと気にしてなかった。むしろ嬉しかった。だってこれは智央が気持ち良くなってくれた証拠だから。

口の中でしっかり受け止めたそれを智央に見せつけてから、唾液と一緒に混ぜ込んでゴックンと飲み込む。それから口を開いて全て飲み込んだことを見せてやった。

それから口の周りについたものも指で掬って舐め取ってやる。

自分の出したものを俺に飲ませてしまったという羞恥心からなのかわからないけど顔を真っ赤にして照れている智央が可愛かった、ドン引きされたっておかしくないってのに。

「あーあ、出しちまったなあ、智央さん思ったより早いんですねえ」

「おまえ、本当に……?」

智央の言葉の意図はわからないが、とりあえず、賢者タイムに入ってるうちに、ちやっちゃんと俺の方で準備を終わらせなくてはならない。

ズボンと下着を脱いで、ベッドのサイドテーブルにあったローションを手にとって自分の尻の方に手を伸ばす。智央に見られてると思うと恥ずかしい。

「ん、んう……」

つぶんと指が入ってくる、昨日も一人でアナニーをしていたから柔らかい。そのまま中をかき回すように動かす。

智央は俺のことをじっと見つめていて、その視線にさえ興奮してしまう自分がいた。

指を動かしながら、もう片方の手で智央のものに触れる。さっき射精したばかりのそれはまた元氣を取り戻しつつあった。

「すげえじゃん、智央絶倫じゃん……」

「そりやあな……」

そりやあな、ってなんだ？とりあえず、智央のモノを握り擦りながら、後ろの穴に挿れた指の動きをもっと深くしていく。智央の熱い視線を感じるだけで感じてしまうなんてどうかしている。

俺の手の中のもののはどんな大きくなっていく。俺の痴態を見てこんなにくれている訳ではないだろうが、そうだったらいいなんて思ってしまう。

「なあ、藍。オレも触りたい」

「はえ？何言ってるんだよ、せっかく育ってるのに萎えんだろオマエの」

「いいから」

なんもよくないんだが、それでも、智央に触ってもらえるまたとないチャンスだ。

智央がローションを手を取って、俺の尻に手を伸ばして穴の縁に触れた。

ぬるりと滑る感覚に思わず身体が震える。

智央は優しく縁を撫でて、そのままゆっくりと第一関節くらいまで入ってきた。智央の指が、俺の中に入った。

そう思うと、もうそれだけでイッてしまいそうになる。

「あ、んっ、……ッ、」

喘ぎ声が勝手に漏れてしまつて、慌ててキュッと口を結んだ。気持ち悪い俺の声で萎えさせたら悪い。

智央の指が俺の中で動いていて、少しずつ奥へ進んでいく。自分の指よりも太くて硬い、ずっと強い刺激に、俺はただ声を抑えることしかできなかった。

智央は俺の反応を見ながら、ゆっくり、慎重に進めていく。

そして、ある一点を掠めた瞬間、びくんと体が跳ねた。

「あ、っ……!!」

「柔らかい……本当に、慣れてんだな」

「っ、もう、いいって、入るからっ……!!」

その反応を智央もすぐ気づいたのかはとした。マズイ。慌てて身体を離れた。

ずるりと智央の指が抜けて名残惜しい。

「なんで、やらせてくれないんだよ」

「い、いいだろ別に面白くないモンだし、ぱぱとぶち込んで終わりにしようぜ」
「……」

また智央がなんかイライラしているようなものを感じて、あれ……なんか機嫌悪い？俺が途中で抵抗したからか。

「まあ許せよ、ほら、あとはコレ俺んナカに突っ込んで射精したら終わりなんだから」

怒りで萎えないようにシコシコと扱きながら、さっさとゴムをつけてやらないと。

口でパッケージを咥えて押さえながら、片手で開けていく。表裏を確認しながら、智央の勃起にゴムを乗せて、クルクルと下におろして、装着する。

よしよし、上手くついたな。

「おい、藍ッ！」

「いいから！せっかく勃起してんだからさっさとやるぞ」

あとは俺が乗っかるだけ。そう思つて智央を見上げた時。

俺をじっと見上げる瞳の奥に何かが燃えているような気がして、ぞくりとした。やっぱ、怒ってんのかな、でもなにか違うような気がする。

その目を覆うみたいに、智央の頭の上にあつた枕を顔に押しつけてやる。

「……おまえは、好きな女のことでも、考えとけよ」

「っ、く……」

智央の勃起を手で支えて、ぴとっ、と俺の孔穴に押し当てる。それだけでゾクゾクした。

ゆっくりと腰を落としていく。先っぽが入っていく、やっぱ智央のはデカすぎて痛い、けど我慢だ。

息ができなくて、浅くなっていく。熱いものが身体の中を押し広げて入ってくる感覚に息を吐いて耐える。

「藍、キツいんだろ……」

「ッ、わ、悪いっ……痛いか……？ちゃんと、するから……」

「藍？」

俺はいっぱいいっぱいだった、ちゃんと智央を受け入れないといけないのに、まさか俺の身体の方に問題があるなんて。

呼吸をなるべく正して、ゆっくり、ゆっくりと挿入していく。半分くらい入ったところで一度止まって、深呼吸をして、もう一度。

智央が俺を呼んでいたが、大丈夫だからと言い聞かせて、一気に最後まで押し込んだ。

「ひ、ぎッ……!」

どちゅんっ、と音が鳴った。

腹の中に熱くて硬いモノがあって、でも、俺の中は浅くて智央のものは全部入りそうにない。

身体が裂けそうなくらい痛い、苦しい。目の前がチカチカとして、身体中が震えた。

「藍、大丈夫かっ……!?」

「だ、いじよぶ……だって、ッ、オマエのが、思ったよりデカかった、ただだから……俺のことは、いい、から……」

驚いたような声をあげて枕を外そうとする智央にぐいぐいと押しつけながら。

俺だつてびつくりだよ、こんなに辛いもんなのかよセックスって。

こんなひでえ俺、見せられねえ。処女丸出して感じた。でも、バレてなきやいいなあ。

「はーっ……はーっ……ッ、……く、」

息をなんとか吐いて、整えながら、ゆっくり腰を上下しはじめた。

もっとちゃんと力抜かないと、変な声をあげて智央を萎えさせないようにしないと。気持ちよくなつてもらえるように、俺が頑張らないと。

そう思うのに、やっぱり上手くない。痛みが勝ってしまう。

智央のが大きいすぎるせいもあるだろう。

でも、それだけじゃない。

なんでか、涙が出そうになった。

「は、っ……っ、き、きもち、いい……か……？」

「……おまえ、」

萎えさせたらマズイって解つてんのにどうしても聞いてしまう。

本当は顔を見てほしいし、俺のことを考えてほしい。俺を抱いてるんだって思
いながら気持ちよくなって、抱きしめてほしい。

でも、全部できない。俺の感情は隠さないといけないから。

「智央……」

痛い。苦しくて、辛くて、死にそうだ。

自分が情けなくて、涙が出てきた。

最初で最後のチャンス、この一回きりのセックスくらいちゃんとしたかったの
に。

「ごめんな、智央……ごめん、ごめんな……」

謝りながらも、俺は必死になって腰を動かした。もう自分でなにをしたいのか、
よくわからなかった。

智央を気持ちよくさせて、満足させたい。けど、全身が硬って上手くできない。
一秒でも長く、智央が、俺を感じていられるように。

忘れないように、身体に刻みつけたいのに。

「なんで、泣いてんのオマエ……」

「は、っ……あ、……」

枕がずれてる、隙間から智央の目が俺を見てる。

ああクソ、見られてしまった。泣いてねえよばあか、って言葉も出てこなくて。このままじゃダメだってわかってんのに。どうしようもできなくて。

「藍」

智央の手がそっと俺の頬に触れて、無骨な指が目尻を擦って俺の涙を拭いた。

そのまま俺の頭に手が伸びて、ぐっと引き寄せられる。俺はその突然のことに対応することもできず、智央の胸に倒れ込んだ。

「智央、……」

俺の口をそっと包むみたいに、智央が唇を重ねてきた。柔らかく食むみたいに何度もキスされて、舌先でぺろりと舐め上げられる。

そして、柔らかく押しつけるみたいに。

智央と、きす、してる……きもちいい……

「ふ……智央っ……ん、ん……」

思わず口を開くとすぐにぬるりとした感触が入り込んできて、俺の舌に絡みつ

いてくる。

ちゅくっ……と音を立てて吸われる度に俺の身体からは次第に力が抜けて、智央に全身を預ける形になった。

智央が俺の身体をぎゅうと抱きしめてくれて、舌がもつと深くまで入り込んでくる。

俺の中を掻き回すように動き回り、智央の唾液が俺の中に流れこんできて、飲み込むと喉の奥が熱くなった。

「ふ、あ……」

「悪いっ……ちよつと、我慢な……？」

「あつ、ああ……!!」

俺の頭を優しく撫でながら、下から智央がゆっくり腰を突き上げてきた。

唇を離されると唾液がとろりと溢れて、名残惜しくなって舌を出すと、追いかけるようにもう一度くつつける。

いつの間にか俺は、夢中になっていた。

そうしているうちに、だんだん痛みが薄れていく。

智央とキスするのきもちい……もっと、智央と触れてたい……。気付けば自分からも動いていて、智央のものを受け入れていた。

「やば、オマエ……可愛すぎる」

「ふあ、あつ、んっ……ん、んっ……」

頭がふわふわしてて、よくわかんない。

けれど、さっきまでイライラしていた様子だった智央は今は柔らかに微笑んでいた。よかった……。

「藍ッ……」

「あ、っ！、ん、っ……！」

ぐいっと思いい切り腰を持ち上げられ、奥へ押し込まれる。そのまま揺るようにな動かされると智央のものが中で擦れ合い、俺の中で快感を生んだ。

「んあっ……あっ……あっ……あっ……あっ……」

智央の動きに合わせて声が出るのを止められない。

気持ちよくて、頭も体も溶けてしまいそうだ。

「藍」

「んう……」

名前を呼ばれて顔を上げると、また唇を塞がれる。今度は俺の方から舌を差し出すと、智央は応えてくれるかのように俺の口内を弄んだ。

「あ、ふ、んむ、っ……ひゃ、……」

名前を呼ばれるたびに頭ん中が蕩けてしまう。

最初で、最後。それでも。

智央に抱かれていることが嬉しくて、幸せだと思った。

「っ、出るっ……藍っ」

「ンん、だし、てっ……」

強めに、ドチュッ……！と突き上げられて、薄い膜越しに、どくつと脈打つように俺の身体の奥で熱いものが弾ける感覚があった。

智央の精液がドクンドクンと脈打ちながら俺の中に膜越しに放たれる。

膨らんでいくそれにその感触にすら感じてしまつて、俺は智央にしがみつきなから体を震わせた。

智央、ちゃんといけた……よかった

「は、あ……あ、っ……」

「ッ……」

智央もぶるっと背中を震わせて、俺の中に射精した余韻に浸っているようだった。

はあ……と息を吐く音が聞こえてきて、ゆっくりと引き抜かれる。

智央の性器が抜けた瞬間、喪失感に襲われて思わず腰を引きそうになった。

智央はぷくりと膨れたゴムの中身が溢れないようにして縛って、ベッドサイドのテーブルの下のごみ箱に放った。

その仕草が妙に色っぽくてドキドキした。

「あ……」

もう一回、抱いてほしい。

わかりきったことだ、人間は一度手に入れたら食欲になる。それも、本来は手にするはずがなかったものの、それに触れてしまったのだから。

でも、もうおわり。俺はまだ震えた脚をなんとか抑えながら、そっと智央の上から退ける。

「へや、開いたんじゃないか……？ 智央……」

俺の言葉の途中で、身体に衝撃があった。

ベッドのスプリングがざしりと鳴って、白い柔らかなシーツに身体が沈む。

押し倒されて、俺は智央を見上げていた。

フーッ……と息を吐いた智央は汗にまみれたシャツを脱いで、俺の前に裸体を晒した。

智央の匂いに目の前がぐらりとする。それと同時に、今度は俺の服に智央は手をかけた。

脱いだらきつと本当に男の身体だからって萎えさせると思ったから、脱ぎたくなかったのに。

「な、んっ……で、部屋、あいたんじゃないか、智央っ……」

「開いてない」

そんなん、確認してみないとわかんないだろ。なのに。

俺を押し倒した智央は、解き放たれた獣のような目をして俺を見下ろしていた。そして、そのまま俺の肩に甘咬みした。

「ッ、もう、しなくていいのにつ……なん、でっ……」

「いいから……やらせろよ、藍」

今度は食われるみたいに、唇が重なる。

ジュツて唇を吸われて、舌で舐められて、口の中まで犯されるようなキスだ。

同時に片脚を肩に担がれる。雄を一度受け入れて拓いたそこに、今度はナマで押しつけられた。

「ん、んう……！ふ、うっ……」

くちゅり、くちゅり、と音が鳴っているのは唇からなのか、それとも下からなのか。

俺の孔穴は、引き込むように智央のものに吸い付いて、飲み込んでいく。

智央は、俺を逃さないようにしっかりと腰を抱いてきた。

熱いそれが俺の中に入ってくる。

「ふぁ、あっ……あぁあ……！」

「やば……すげえ……」

男だからされっぱなしでいるのは嫌だということなのか、単にまだ足りないの

か。

でも、どちらにしても、智央から求めてもらうのは嬉しかった。

智央が、俺にその味を教え込みたいに、腰をぐるりと回して馴染ませてくる。奥がゾワゾワして、もっと欲しいと言わんばかりに締め付けてしまうのが自分でもわかった。

ぐっと、智央の性器が俺の中で大きくなった気がする。

ゆっくり、確かめるように引き抜かれて、また挿れられる。それだけでとろとろになりそうなほど気持ちよかった。やっぱ女抱くの慣れてんだなと思う。

「おんなど、違うっ……?」

「全然ちげえよ……」

そりやそうだよな。なんできいちゃったんだろ。

女はなんか良い匂いしてて柔らかくてふわふわしててどこさわっても気持ちよくて。俺なんて硬くて抱いたって気持ちいいわけないのに。

♡喘ぎ、汚喘ぎ サンプル1

「ああ、ああッッッ？！」

グリッ……♡と一番だと思っていた奥の、さらに奥に振じ込むように腰を回されて、頭がチカチカと点滅した。

何度も奥を穿たれて苦しいはずなのに、身体の奥底では歓喜するようにきゅむ、きゅむって媚びるように締め付けている。

「オマエのここも、もう、良さそうだなっ……」

「そこ、っ、あああ！あっあああッ……！！」

「結腸口、いいよなッ、貫いても……！！」

グリユッ、ぐりゅっ……♡

結腸奥、湾曲した狭窄部を広げるみたいにして振じ込むとしてくる。

本当なら痛いはずなのに、気持ちいい。

こんなの、夢でしかない。そう思うけど、夢だとしたらあまりにリアルすぎる。そうして、ある程度開くようになじまされたあととはじっくりと体重をかけられ

て、結腸奥の肉壁を突き破るようにして、振じ込まれていく。

「お、ひら、いちやあ、おッ、ああおッ……！」

「ほら、イけよ……結腸奥でイけ……！」

ぐぼんっ……♡

結腸奥、男の子宮口、その一番奥に智央のカリ首が入り込んできた。その瞬間、今までで一番大きな絶頂に襲われ、頭の中で火花が散った。

「お♡、あああッ♡♡あああああッ……ッ♡♡♡!!」

「すっげ、吸い付いてくる……」

視界は真っ白に染まり、全身は痙攣しっぱなし。

息ができない。声も出ないくらいの深い深いアクメに溺れる。

けれど、それで終わりではない。

智央が腰を回すたびにぐぼっ……♡と音がして、俺の腹の中で智央のモノが動いている。

「これでも夢だっというのかよ」

「ひっ……あああッ！やっ、あああ——ッ♡♡」

智央は俺の顔を見下ろしながら腰を振り続ける。

智央が腰を引くたびに繋がった場所から卑猥な水音が鳴る。

そしてまた奥まで一気に叩きつけられて、グリユグリユッ♡て押し付けられると、結腸奥が勝手に智央のちんぽをジユパッ……♡って吸い付いてしまう。

「ひいっ♡あっ、ああああ♡♡智央ああ♡♡」

「やばい顔してんぞ、すげえ興奮する……」

気持ちよくて仕方がない。

智央にこんなに激しく求められてる。それだけで幸せだった。

智央は俺を抱きしめながらキスをしてきた。

舌を絡めて唾液を交換して、そのまま智央に抱きつくようにして腰を揺らすと、智央がそれに合わせるようにバツツ♡バツツ♡と腰を打ち付けてきた。

「んうづッ……！？♡ふ、ンウウッ……！！ッ♡ッ♡」

きもちいい、きもちいい……

涙やら涎やら汚液で顔をぐちゃぐちゃにして、獣みたいに喘いでる俺に、智央は口角を上げて目を細めて笑っていた。

結腸奥を何度も何度も突き上げられて、その度に意識が飛びそうになる。もうずっと気持ちよくて堪らない。

頭が馬鹿になりそうなくらいの快楽を与えられ続けて、俺はただひたすらに智央にしがみついて喘ぎ続けた。

夢なはずなのに、こんな強烈な夢あるか。俺はもうわからなくなっていた。

「あああ♡あああ♡——♡♡♡」

ぶしゅ……♡と萎えた自分のものから、精液とは違うさらさらとした液体が溢れた。よくないと解ってるのに、もう耐えられなかった。

♡喘ぎ、汚喘ぎ サンプル2

「イっていいよ……ほら」

「あうううっ♡いくうっ♡いくっ♡ひううっ♡智央ああっ♡」

ごりゅっ♡どちゅっ!ごぷっ♡ぐぢゅっ♡♡ぶちゅうっ♡♡と何度も叩き込まれるたびに絶頂する。

突き上げられる度にイきすぎてもうさらさらの精液がぶしゅっと出てしまっ、もうずっとイキっぱなしになってるような感覚で頭がバカになっってしまう。

「イけ……♡」

「んあ、ああっ♡あああああっ……♡♡」

甘く命令されて、脳の奥がびりびりして体が硬直した。足指がぎゅーって伸びて、腰を跳ねさせる。

俺の肉壁の動きに合わせて、智央の硬くておっきいチンポがビクビク♡って跳ねてる。じわ……♡って俺の奥で先走りを零されて、その感覚にも感じてしまう。

「もー、すっかりオマエのココ……オレのチンポ啜える穴になっちゃったなあゝ……♡オレのチンポ専用のマンコ、気持ちいいなあ？」

「あう、あううっ……♡智央のちんぽ、いっぱい……♡智央、せんよーおまんこ……♡うれし、い……♡」

頭の奥で恥ずかしいって思うのに、それよりも智央に言われると嬉しい気持ち
が大きい。きゅんってアナルを締めてしまつて、また中で大きくなったのがわか
った。

ずるる……つて抜かれると、それだけで感じてしまつて、びゅくつと軽くイッ
てしまうのに。ずんっ♡と奥を突き上げられる感覚に、背筋が反る。

「んお♡あ、ああ……あああ♡んっ、んうっ……♡」

くちゅっ♡じゅるっ♡ちゅるるっ♡ちゅううっ♡

唇を塞がれて、舌を絡め取られる。上も下も繋がって、一つになったみたいな
幸福感に酔いしれる。

何度も何度も角度を変えてキスをされると、その度に甘い感覚が広がっていく。
もっとしてほしい、たくさんほしい。そんな欲望が溢れてきて、自分から舌を

伸ばして絡ませた。

粘膜同士が触れ合って、絡み合う感触がたまらない。舌が擦れるたびに、ぞくぞくとした。

「はー可愛い……」

「ぶあ……あ、あうっ♡おれもっ……ともひさのこと、気持ちよくしたい……♡」
「んー……じゃあ、逆向いて上乘れるか？」

「うん♡うんっ……♡あ、あっ……」

ぬぼ……♡って智央のチンポが抜けるとナカが寂しくなる。はやく、智央のおつきくてあつついものにいつぱい埋めてほしくなる。

智央が寝転がって、足を伸ばす。智央の手に支えられながら、背中を向いて、足の合間を跨いだ。

「ん♡んんうううっ♡」

背面騎乗位で智央のチンポを飲み込んでいく。俺のお尻は本当に智央のチンポを咥える穴になってしまったみたいで、ぬぢゅううっ……♡って簡単に咥え込んでいく。最初に痛がっていたのがウソみたいだ。

後ろ向きで上に乗っかることなんてなかったの、いつもと違う場所をぐりゅううううっ♡って押し込んでくるから、それだけで腰が抜けそうだった。

「はは……♡挿れただけでまたイったな♡」

「イっちゃったあ……♡あうっ……♡んっ、んううっ……♡」

智央が俺の腰を撫でる、それだけで内側がざわついてしまう。

腰を揺すられて、ぱちゅっ♡ぐちゅっ♡と粘っこい水音を立てながら、下から突き上げられる。そのたびに奥の奥まで入り込まれて、息ができなくなるほど気持ちいい。

「んあっ、らめっ♡ともひさっ、あう、うごい、たらあっ♡んっ、んうっ……♡おれ、ちゃんと……動く、からあ……♡」

「ふふ、ほんとにやれんの♡」

「やれ、るにっ……決まってるだろおっ……♡」

智央の太腿に両手について、ゆっくりと腰を動かし始める。

お尻だけを浮かすように、上下に揺らして、抜いて、入れてを繰り返す。

ぬちっ♡にゅぽっ♡ずりゅっ♡ぐちいっ♡♡

少しずつ早くしていくと、結合部から泡立った液体が零れて、下品な水音が聞こえてくる。

「お前のケツマンコが俺のチンポしゃぶってる音……♡たまんねえなあ……♡」
「ひうつ♡う、ううつ♡♡♡♡あ、ああ♡♡♡♡♡」

上下に動かすだけでも奥深くまで届いてしまい、浅くすると亀頭が前立腺を押し潰してきて気持ちよくなってしまう。

でもまだ大丈夫、耐えられるはずだ。だって俺は鍛えているんだし、体力には自信がある……！

「あうつ♡んあ……あつ♡あ……♡♡」

「エロい腰使い……じょーずになったなあ、ケツも最高……俺のチンポがエロ穴出入りしてるの丸見え」

尻の柔らかさを手のひらで楽しむかのように揉まれながら左右に開かれる。そんなとこまじまじと見ないでほしい、はずかしくてたまらないのに。

「はは、ナカすげえ絡みついてくる……やりまくってんのにピンク色しててやらしーなあ？ひくひくしてんじゃん」

「んあ、ああ♡はうつ、うああ♡ふち、なでないでえ……♡」

皺が伸びるほど開いたアナルの縁を指でなぞられると、ぞわわっと肌が粟立つ。智央に触れられているというだけで興奮してしまって、中がきゅううっと切なく疼いた気がした。

内壁が勝手にきゅゅっ♡って智央のチンポを締め付けてしまって、その大きさと硬さを実感してしまう。

「お、おっきい……♡智央のお……♡ああ、あああうつ♡」

「ほら、がんばれ♡オレを楽しませてくれよ♡♡」

「んひっ♡ひあつ、あああ♡だめ、っ、まだあ♡♡」

手首を後ろか掴まれて引っ張られる。もう倒れ込んでしまいたかったけど、まだ智央を気持ちよくできていない。俺だってちゃんと智央のことを気持ちよくさせたい。そう思ってるのに。

俺が少しでも動けば、智央もそれに合わせて腰を浮かせるから、カリ首がゴリゴリってして、結腸口を叩かれて、頭が真っ白になるような快感に襲われる。

「あー♡お前の子宮口吸い付いてくる……♡」

「あうううつ♡だめ、だめっ、動けなく、なるうつ♡うああ、あああっ♡」
ぬろおっ♡ぬちっ、くちゅっ、ぐりっ♡ぐちいつ♡
奥に押し当てられるともう自分の身体じゃないみたいに言うことを利かなくなる。

♡喘ぎ、汚喘ぎ サンプル3

「オマエんナカ、どうなってるか教えてくれよ」

乳首を弄っていた指がゆっくり下におりてきて、俺の下腹を撫でた後、臍の下あたりをぐっと押し込まれる。

それだけで気持ちよくなってしまうて、びくっと腰が跳ねた。

そして、そこに入っているものを確かめるようにぐっぐっと圧迫される。

そのたびに、ぢゅううっっ♡って俺のマンコが智央のチンポに吸い付く。

「ともひっ♡おっ♡ともひさのチンポおっ♡俺のナカあ♡ああ、出たりいっ、お♡おおっ♡ッ♡」

俺の言葉に合わせて、ずるるっっ♡ってチンポが抜けていく。前立腺をカリ首でぐりぐり♡ゴリゴリっって引っ搔いて、精液がごぽっ♡って後ろ穴からこぼれる感覚にまたいく。

「おっ♡あああああぶ入ったりいっっ♡ッ♡♡んんおお♡おお♡」

ぐぶぶぶっ……♡じゅぶうううっ♡グポッ♡

俺のナカに帰ってくるときも、前立腺をぶちゅううっ♡って潰しながら、そのまま奥をぐっぽりこじ開けてくる。

ゆっくりした動きなのに、その一つ一つを俺の身体に教え込むように動かすから、俺は喉を晒してただだらしなく舌を突き出しながら喘ぎながら仰け反りメスイキを極めることしかできない。

「っんっ♡ああ♡ともしゃのチンポ♡いっぱい、いっぱい♡俺のマンコ♡気持ちよくして、くれてるうううっ♡♡♡」

「お前のケツマンコもすっげえ気持ちいいよ♡」

腹の上を手のひらで撫でるような動きから、人差し指と中指で俺の肉道の上からなぞるように押し込んでくる。

「入口はキュウッ♡キュウッ♡って俺のチンポ締め付けてきて……」

「んお♡お、おおっ♡んううっ♡ううう♡♡」

入口の裏肉を指でくすぐるように撫でてから、腹の上から肉洞をなぞるように、指が上に登っていく。

「ナカはトロツトロで、でもイくたびに、キュン♡キュンっ♡ってすんの……ほら、今もキュン♡って締まった……肉ヒダ一枚一枚が俺のチンポの血管に絡みついて……」

「おおっ♡おっ♡んっ、んうううっ♡♡」

ずろずろ……♡前立腺をこりこりと亀頭溝でひっかいたあと、肉洞全体をかき回してくる。もうどこを擦られても頭がバチバチって弾けて。

「それから、結腸口♡ちゅぱ♡ちゅぱ♡って俺のチンポ大好きって吸い付いてくんの♡離れたくないようにって言うてるみたいで素直でかわいいな♡」

「ん♡んううっ♡ふううっ♡っ、んくっ♡ん うううう♡」

奥に押し当てたまま腰をまわして、ぐちゅぐちゅぐちゅ♡ってかき回してくるもうチンポのことしか考えられなくなるくらい、頭がぐちやぐちやで。

でも、もっと……奥に早く愛しい雄を引き戻したくて、子宮口がぢゅううううって吸い付いてしまう。

「結腸奥♡俺のザーメン搾るみたいにジュッパジュパしてくんの♡」

「おっ♡おぉおッ♡お♡おぉおぉ♡♡」

ご注意

この作品はフィクションです。実在の人物、団体、事件などには一切関係ありません。

本作の音声、イラスト、小説、台本などの複製、無断転載、無断アップロード等を許可なく行うことは固く金治させていただきます。

何かございましたら宮代あかこ(@a_ka_ko)までお送りください。

<https://lit.link/akak0>



イラスト 永麗(@nagare0x)

小説 宮代あかこ(@a_ka_ko)

連絡先 akako.sivash@gmail.com